

はてな

1992年 5月 No. 132
(事務局)〒
津田 尚美方 TEL
(編集)〒
町田 陽子 TEL

長崎市にも若い間、私達がまちのぞみ、設置へ何れ様々陳情その他の活動をつづけて
「女性センター」が不承不覚に設置され仮設される事になりました (しかし、今や仮設は、
いづれ本物の独立した建物で、

との願いはすていけません。

そこで

女性センターをまちのぞむ会

[連絡先/

が出来、本当に女性のためのセンターとなる様、活動を開始します。

私たちは、昨年暮れ、女性センターについて考えようと十数名が集まりました。当時、長崎市
に設立される予定であった「女性センター」に関して、ほとんどの女性が知らないという現状で
した。また、従来のような行政主導型の運営では、いつまでたっても、私たち女性が本当に待ち
望む内容とはならないような気がしました。また、私たちはこの会をきっかけに、さらに多くの
女性たちが「女性センター」が設立されることを知り、関心をもってほしいと願っています。

5月23日。

この秋、女性が変わる、長崎が変わる

ー長崎市女性センターオープンにむけてー

講演 『横浜女性フォーラムからのメッセージ』

という会を計画しました

講師紹介

桜井 陽子 (横浜女性フォーラム事業コーディネーター)

1947年生まれ。

公益法人でOLで2年半勤務し、出産を機に専業主婦へ。

2年後、フリーライターとして、活動開始。

1981年 女性だけの編集プロダクション〈ガール・エターナル〉を設立し、代表となる。

1987年 財団法人 横浜女性協会：横浜女性フォーラム事業コーディネーターに就任し、
現在に至る。

招いたのは 桜井 陽子さん

はてなフォーラムの S.K. さんが出席し 当日の様子を次頁のように報告に
くれました。

5月23日、長崎にすてきな女性がやって来ました。『女性も男性もそれぞれの個性を発揮しながらいきいきと暮らす社会——自立した女性と男性がつくる、そんな社会の実現を目指して』3年半前にオープンした横浜女性フォーラムのコーディネーター桜井陽子さん。フォーラムの成り立ちから、現在の事業内容、これからやりたいことetc 盛りだくさんの内容で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。その中で私が特に印象に残ったことをお話します。全体的に利用者に対して細かいところまで心配りされているなあと思いました。それはフォーラムを開館する前に7年間にわたり地域女性の意識実態調査が行われ、市民の中にどういうニーズがあるかがしっかりと把握されていたからでしょう。たとえば、相談コーナーでは

- ・相談時間に最低2時間はかける
- ・相談室の家具は職員がショールームで選んだものを置き、中庭に面した部屋でゆっくりと相談できる。
- ・相談者は予約なしでも0才児からの子供を預けられる（普段は予約性）

という具合です。他には男性WCにもベビーベッドが置いてあったり、...

事業グループでは、学習啓発活動（うけたまわり学習）よりも、出口の見える事業を目指しているそうです。その出口とは、講座で身につけた技術や資格を具体的な社会参加に結びつけるということです。たとえば、本作り講座では、

- ・文章講座から始まり、最終的には本を1冊出版する。そしてその本を実績として受講生が出版社などへ売り込んでいく。

というように次のステップへつなげる講座になっています。

3年半やってきて、見えてきたことはフォーラムは総合施設であり、それが有機的に結びついて初めてその役割が果たせるということ、だそうです。つまり1つの講座に来た人が、それだけを利用するのではなくて、ほかのすべての機能を利用してもらうこと。

たとえば、再就職セミナーの受講生が、仕事をするに当たり夫や子供のことで悩みがあれば相談コーナーを利用し、仕事の情報は情報ライブラリーで本・ビデオ・コンピューターを使って探す。さらにフィットネスルームで体をほぐしたりetc というふうに。

今後は、フォーラムの中だけでやるのは限界があるので、もっと外に出ようと考えられているようです。地域活動をやっている、いいアイデアやネットワークをもっているのに資金や場所がないという人のための、サポートシステムで、アイデアを具体化していくために市民グループを支援しようというものだそうです。

フォーラムではいろいろなプログラムを開発しています。（外国から輸入して改良した講座ルトラヴァイエ etc）それらを出張講座として長崎の女性センターでも利用して下さいね。という嬉しい話も出ました。そして桜井さんが帰られるころには、さっき降った雪がうそのような青空が広がっていました。

付 フォーラムの職員はほとんどが公募で、年齢制限 50才

現在42人の職員のうち、♀33人 ♂9人

目の不自由な方のために点字の問題作製も行ったそうです。

この講席の中で おもしろかったのは...

「他の機関ではよくどこかの校長とかが、天下りの様な感じで女性センターの館長に
あたりですけど、そうやう人は困っちゃうのよね。」

女性問題を知らない人がエト立つと、職員の人がかかわりそう。

市民活動やらをしている 私のような人に、ポストがまわってきたのは 時代が変えて来た。

そして それはフォーラムと関連した女性政策推進室の人達の考え方とか それを伝える
市民の力にもお世話でしょう」という所でした。

そして横浜では ① 市民の中に どのようなニーズがあるか (ソフト面)

↓

② どうやう着か (ハード面)

↓

③ どうやう人材が必要か

という風にソフト面からの出発だったので 悪い結果にはなっていないはず ということでした。
毎時では①が欠けている様々と思います。

ちなみに フォーラムの職員 20人が公募されました。

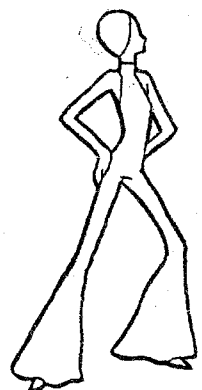
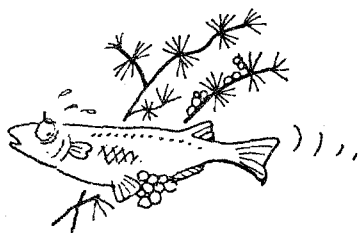
1,200人中申込みがあったそうです。

採用者の最年長は49才 (現在は52才かな?) の才。

フィットネスクラブのインストラクターで

ピンクのレオタードを着て 歩いて 110km/h
との事だ。

(S. K.)



女性とメディア

加藤春恵子 編
津金澤聰廣

『世界思想社』から出版されたこの本は著者の一人が贈られた。マスメディアの現場にいる女性達が日々、現場からの性差別に対する抗議の本です。

日本のCMの分析結果

さて日本のCMの分析研究としては、FCT（市民のテレビの会）のテレビ診断分析調査が挙げられる。またカメラワークとカメラアングルの分析では、「外国」の女性の身体を顔、目、口、腰、足、と部分的に超クローズアップする画面、首のない身体の画面が多く、カメラが男性の目となって覗き見る場面が多いことを指摘している。

また韓国の留学生、崔俊鎬（チェ・ジュンホ）さんが、日本のCMを分析し修士論文にまとめたという記事が『読売新聞』に載っていた（八九年四月二十四日付）。八八年の六月中旬、一週間分のすべての民放のCMの中から、一、二〇〇本の内容の違うCMを取り出し分析したものだという。

それによると、①女性は食品・家庭用品・サービスのCMに、男性は酒・たばこ・産業機器・金融・娯楽用品のCMが多い、②女性は家の中で、男性は遊び場・大自然の中が多い、③女性は美しさで目を引くためのモデルとして、男性は職業人としての登場が多い、④年齢別では女性は二〇代に集中しているのに、男性は各世代にわたっている、などを指摘したうえで「日本のテレビCMは、女は家庭・男は仕事という実社会の性別役割分業をめぐりに反映、反復したもの」と述べているという。

CMの性差別をなくすには

さてこれまでCMコンテストや抗議を行ってきたが、たしかにCMは変わったし、成果はあったと思う。時代が変化したからといえどそれまでだが、たとえばリポビタンDの新聞広告。夏の高校野球の期間中に、八九年からスポーツ欄に掲載されて三年になる。最初の年は応援席で声援する女子生徒ばかりだった。折るようなポーズに「なんでもするから」とか「負けないで」というコピーがついていた。

『会報』第五号（一九八九）でこれを取りあげ、スポーツを隠れ蓑に「主役は男、女は脇役」というメッセージを繰り返すと書いたところ、九〇年にはコピーが消え、九一年は男子生徒が登場した。

CMの中の性差別を告発する運動は、消費者問題ではなく、女の人権（ひいては男の人権）の問題である。CMというメディアの力、社会的責任を、送り手（企業と制作者）も受け手も自覚し、性差別をなくさねばならない。そのためには、まず受け手が差別を見抜く目を養い、性差別を許さないことである。抗議や支援をすることで送り手に意思表示するアクセス権を主張するのは一つの方法である。

次に送り手の側に、性差別を見抜く視点を持った人間が増えることが大切である。端的に言えば、もっと女性が増える必要がある。

とにかく一人一人が自覚し、声をあげ関わることでしか、

CMの中の性差別を

なくすことはできない。

その中で日頃私達がいつも感じていること。「おんなは私達が話している事と一般の部分とをわけておくれ」といふのが、これです。この頃のCMの女性の扱われ方。とても腹が立ちます。それに声もあげなければいけない毎日があります。やはり声を上げていこう。CMも変えよう。という気持ちもわいてくる本でした。